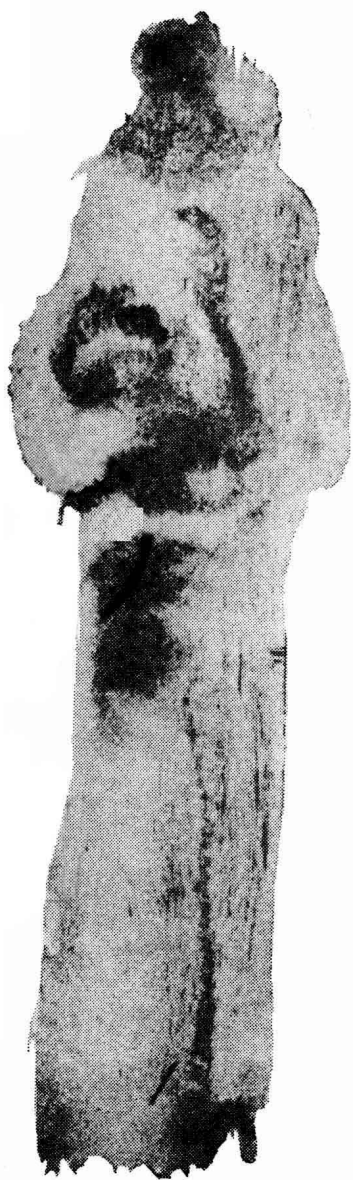


藥と海

作周藤遠



海と毒薬



昭和三十三年四月十日 第一刷
昭和五十一年五月十日 第十一刷

著者 遠藤 周作
えん どう しゅう さく

發行者 檜原 雅春
えん げん じゃ ちはる

發行所 株式會社

文藝春秋

東京都千代田區紀尾井町三
振替口座東京七七八三番

萬一落丁亂丁の節はお買求めの書店
又は發行所にてお取り換え致します

本文印刷 精興社
カバー他 大日本印刷
製本 中島製本

目 次

海 と 毒 薬

第一章 海 と 毒 薬	5
第二章 裁かれる人々	95
第三章 夜の明けるまで	165
ジュルダン病院	203

裝 幀・川 端 實

海

と

毒

藥

第一章
海
と
毒
薬

八月、ひどく暑いさかりに、この西松原住宅地に引越した。住宅地といつても土地會社が勝手にきめただけで、新宿から電車で一時間もかゝる所だから家かずはまだ少ない。

驛の前を國道が一本、まっすぐに伸びている。陽がカッと路に照りつけている。どこから來るのか知らないが砂利をつんだトラックがよく通る。トラックの上には手拭を首にまいた若い人夫が流行歌を歌っている。

泣いちや卷けない出船のいかり……

さすが男よ、笑顔で卷いて

そのたびに黄色い埃が濛々とまき上り、埃がおさまると道の兩側から幾軒かの店がゆつくりと

浮び上つてくる。右側には煙草屋と肉屋と藥屋とが、左側にはソバ屋とガソリン・スタンドとが並んでいるのだ。そうだ。それから洋服屋もあることを言い忘れていた。洋服屋は、ガソリン・スタンドから五十米ほど離れた地點にひとつだけポツンと建っているのだが、なぜこんな邊鄙な所をえらんだのかわからない。

トラックがまき上げる埃のために、紳士服御用と書いたベンキも、ショオウインドオの硝子もすつかり白っぽい。ショオウインドオの中には肉色の人形の上半身がおいてある。あやしげな衛生博覽會などによく陳列してある白人の男子人形だ。頭が赤く塗つてあるのは金髪のつもりである。高い鼻と青い色の眼をもつたその人形は一日中、謎のような微笑をうかべている。

私が引越した月はひどく雨の降らない日が續いた。ソバ屋とガソリン・スタンドをつなぐ畠はすつかり罅割れて、水氣を失つた玉蜀黍の根の間でキリギリスが乾いたくるしそうな聲で喘いでいた。

「こう暑くつちや、お風呂にはいたいけれども」と妻が言つた。「お風呂屋も随分、遠いのねえ。」

風呂屋は國道を驛の反對側に逆もどりして三百米ほど歩いた所にあるそうである。

「風呂屋も風呂屋だが、醫者はいないかね。俺も毎週一回は氣胸を入れねばならんし——。」

翌日、妻が醫院をみつけて來た。風呂屋のすぐ近くに内科と書いた保險醫の看板が出ているのを見たと言う。昨年、會社の集團檢診で私は左肺の上葉に豆粒大の空洞を發見されたのだ。幸い肋膜が癒着していなかったたので肋骨を切らずにすんだが、こゝに來る前に住んでいた經堂の醫者から半年の間氣胸療法を受けていた。だから引越しをすれば、すぐ代りの醫者を見つける必要があつた。

妻に教えられた道をさがして、その勝呂^{かつろ}という醫院をたずねてみた。夏の西陽が風呂屋の窓硝子に反射して、近所の百姓たちの家族が入浴に來ているのだろうか、湯をながす音、桶をおく音がかすかに聞えてきた。それはひどく倅せな音のように私には思われた。醫院は風呂屋の裏側に赤く熟れたトマト畠をはさんで、すぐわかつた。

醫院といつても公庫で建てたような小さなモルタル作りの家である。垣根らしい垣根もなく、陽に焼けただれた褐色の灌木をトマト畠との境いにしてゐる。まだ夕暮なのになぜか兩戸をしめきつていた。庭にはよごれた子供の赤い長靴が一足、落ちていた。あわれな犬小屋が入口にあつたが、犬はいなかつた。呼鈴を幾度も押したが誰も出てこない。私は庭にまわつた。兩戸を少しあけて、白い診察着を着た男が顔をだした。

「だれ？」

「患者ですが。」

「どうしたの。」

「氣胸をうつて頂きたいと思ひまして。」

「氣胸？」

醫者は四十位だろうか老けた感じのする男だつた。あごを右手でしきりにさすりながら、彼は私をぼんやりと凝視していた。西陽をこちらは背にうけているためか、雨戸をしめきつた部屋はひどく暗く、その暗い影のなかでこの男の顔は妙に蒼黒くむくんで見える。

「今まで醫者に見てもらつたのかね。」

「はあ。半年ほど空氣を入れてもらいました。」

「レントゲンは？」

「家においてきましたが。」

「レントゲンがなくなつたら仕方がない。」

醫者は、そう言つたきり、また雨戸をしめきつてしまつた。私はしばらくジッとそこに、たつていたが、家のなかからはかすかな物音も聞えなかつた。

「變な醫者だね。」と私はその夜、妻に話した。「あれは變な醫者だよ。」

「患者を選ぶんでしよう。」

「そうかも知れんな。それに言葉に妙な訛りがある。レントゲンがな、かとなら——か。東京に長くない人じゃないね。どこか地方から來た醫者だ。」

「とにかく氣胸をいゝ日に入れて九州へ行つて下さいよ。妹の式も九月に迫つてゐるんですから。」

「うん。」

けれども私はその翌日も翌々日も勝呂醫院の所には行かなかつた。左肺の空氣は少しずつ減つてきて、段々、息ぐるしくなつてきたが、あの醫者から針をさゝれるのがなぜか不安なような氣がしてきたからだ。

氣胸は普通、胸の側面に疊針ほどの太さの針を入れる。針にはゴムのチューブがつけてあつて、そこを通る空氣が胸に送られて、空洞を少しずつ潰すというのがこの療法なのだ。私にとつてこの治療がイヤなのは針を入れられることではなく、その場所が脇の下だということだつた。脇の下は平生、腕で防ぎかくしている部分である。腕をあげて氣胸針のさゝれるのを待つ時、私はなぜか、胸の側面にヒヤリとした冷氣を感じてしまう。その冷氣にはたしかに腕をあげることによつて防ぎようのない狀態に身をおかねばならぬ不安がまじつてゐるようである。

かよいなれた醫者にさえ、針をさゝれるのがイヤだから新しい醫者にたいしては尙更、心もとなかつた。下手な人にかゝると自然氣胸という突發事を起す時がある。自然氣胸を起すと患者は窒息するのだ。私は兩戸から首をだした勝呂醫師の何處か蒼黒いむくんだ顔や、暗い陰氣な部屋

の翳を思いだし、なんだか行く氣がしなくなつたものである。とはいへ、いつまでも我儘を言つてはいられない。私の義妹の結婚式が半ヵ月後、九州のF市であるので、妊娠している妻の代りに出かけねばならなかつた。妻は兩親のない義妹のたつた一人の身寄りなのである。

レントゲン寫眞を持つて行こう、行こうと考えているうちに二、三日たつた。

その二、三日後、私ははじめて、この風呂屋に行つた。土曜日だつたから私は午後二時頃、會社から家に戻つてきた。路でトラックに追ひこされ白い埃を頭からかぶつたのである。

時間が早いせいか湯ぶねのフチに狐のような顔をした男が兩手を靠らせて顎をその上にのせていた。こちらをしばらく見つめていたが、聲をかけてきた。

「風呂は今頃がいいやねえ。」

「え？」

「風呂は今頃がいゝやね。遅くなるとこの邊の百姓の子が湯を汚すからなあ。あいつ等は湯の中で小便をするから、かなわねえ。」

私は隅の方で體をかくすようにして細い腕とうすい胸とを洗いながら、この男が驛に近いガソリン・スタンドの主人であるのに氣がついた。いつもは腰の所にバンドのある白い作業服を着てホースなどを持つているから、私にはわからなかつたのである。女風呂のほうで子供の泣く聲がきこえた。

彼は大きな音をたてて湯槽から上つた。壁鏡に彼の狐のような顔がうつつた。

「ドッコイしょ。」と彼は言つた。そして桶の上に尻をおいて長い足を洗いはじめた。

「あんたはこゝへ來て間もないんだろ。」

「一週間です。これからお世話になりますよ。」

「仕事は何をしている、ね。」

「釘の間屋に勤めています。」

「會社は東京かね。こゝから東京まで通うのは大變だろ。」

私は彼の胸に下着の白い痕が残っているのをそつと眺めた。肋骨が少し浮きでてはいるが、い

わゆる骨組の逞しい體だ。私のように虚弱な男は同性の體格にたえず劣等觀念を抱くのである。マスターの右肩には直徑十糎ほどの火傷らしい傷あとがある。その肉のひきつりはカンナの葩のような形をしていた。

「あなたの女房は妊娠らしいなあ。」

「はあ。」

「この間、驛の方を歩いているのを見たが、随分、くるしそうだつたね。」

「この邊にいい醫者がいますか。」

私は勝呂醫師でない醫者をたずねてみようと思つた。私の胸のことは兎も角、妻の體のこともそろ／＼心配しなければならぬ。

「勝呂病院がすぐ、そこじゃないか。」

「腕はいいんですか、あの先生。」

「悪くないつて話だぜ。無口で變つた醫者でね。」

「變つてゐるようですな。」

「勘定をあまりやかましく言わねえしな。ほつといても黙つてゐるぜ。」

「昨日、行つたけれど雨戸をしめていましたよ。」